まちづくりひろしま

被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第５２号（令和３年３月１５日）
読者数：６６１名（募集中）
ﾒｰﾙ: hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp
HP:https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

ポスト・コロナを目指して乗り越えていこう！

○巻頭言
広島市現代美術館

○Hihukusyo ラジオ報告
展覧会場での四國光氏

○ひろしまのまちづくりの動き
基町クレドふれあい広場

○映画「ヒロシマへの誓い
サーロー節子とともに」
ⓒ2019Not Just a Survivor Film, LLC

目　次

○巻頭言：爆心地・原爆ドームを指すヒロシマの軸線をつくろう
……心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事　高東博視
○ひろしまのまちづくりの動き
・新サッカー場建設の動向
・紙屋町・八丁堀地区（通称「カミハチ」）のまちづくり
○広島の復興の軌跡・人物編：米国人タム・デーリング……編集委員　石丸紀興
○ほっとコーナー：やればできる！菌が美味しい仲間になる！
……北広島町地域おこし協力隊　前田奈津枝
○Hihukusyo ラジオ報告：ゲスト 四國　光（反戦画家・四國五郎氏の長男）
○被服支廠キャンペーンより：この１年を振り返る……メンバー　瀬戸麻由
○映画「ヒロシマへの誓い サーロー節子と」の紹介：パーソナリティ 三浦ひろみ
○編集後記：新しい日常の中のまちづくり…… 編集委員　前岡智之

□ 巻頭言

爆心地・原爆ドームを指すヒロシマの軸線をつくろう

NPO 法人・心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事　高東博視

平和記念公園の中央を南北に貫くライン。原爆ドーム、原爆慰霊碑そして原爆資料館を一直線上に結ぶ。公園の設計者、丹下健三が「軸線」と呼び平和と祈りの象徴と位置付けた。

このラインは東西に一直線にのびる「平和大通り」と一体となり、市街地を取り囲む青垣山と広島湾（瀬戸内海）を含めて、ヒロシマの象徴的な都市空間を形づくっている。

広島にはこの他にも重要な軸線がある。

市内を見渡す比治山の山頂に、日本で最初の公立現代美術館がある。高い樹木が生い茂る小道を抜け、美術館正面のエントランス階段を上ると円形広場に出る。

この広場には円形の屋根が架けられているが、一か所で屋根が切断されている。円の中心から切断部分を通った直線はヘンリー・ムーアのブロンズ彫刻「アーチ」をつらぬき原爆投下地点を指す。設計者・黒川紀章によると、この直線は爆心地と現代美術館を対峙させ「歴史と現代の共生」の意味を生成しているという。

広島市現代美術館

環境局中工場は臨海部に建つ世界有数の美しい清掃工場といわれる。平和記念公園から南にまっすぐ延びる吉島通りの突き当りにある。この吉島通りのラインにピッタリ合わせて、幅５ｍのガラス張り歩行者トンネル（エコリアム）が清掃工場を貫通し一般開放されている。

設計者・谷口吉生は「この敷地は広島の重要な都市軸に乗っている場所で、都市から海へ続く景観の境にあります。そこで私は吉島通りを延長して、海へ通り抜ける空間を敷地内に作ろうと思いました。」と語っている。谷口は丹下の「軸線」を都市的スケールで受け止め、中工場に実現させたものと考えられる。

広島市環境局中工場

余談になるが、広島ビッグアーチにフランス人を案内したことがある。イチョウ並木の美しいプロムナードをゆっくり上って、スタジアム正面入り口に着いた。ここで、上ってきたイチョウ並木の方面を振り返り真剣に尋ねられた。「このずっと先に原爆ドームがあるのか？」

聖火台からイチョウ並木を一直線に結ぶラインは広域公園の骨格を構成するが、このラインを市街地に延長すると、残念ながら原爆ドームから約２km 南に外れている。「軸線」を郊外から市街地内部まで壮大に延長して、平和都市ヒロシマの姿を思い描く創造力に強く心打たれた。

広島ビッグアーチ

かつてビッグアーチの計画に当たり、この軸の延長を想い描くことは全くなかったと聞く。

「軸線」の概念は古く、ルネサンス時代までさかのぼるという。宮殿や公園デザインに眺望・景観の軸が展開され、壮大な眺望軸をもつパリ・シャンゼリゼ通りへと発展し、一時期は権威や権力と結びついた側面もあったが、現代まで世界各地で洗練され続けてきた。わが国では、古くから城下町に軸があったほか、神社・仏閣の参道などに崇高で荘厳な軸をみることが出来る。近年、「軸線」は都市景観を構成し、機能的で秩序ある都市空間を実現するため、欠くことの出来ない概念となっている。

一方、「軸線」は長い年月を経て街や都市のシンボルへと発展し、そこに住む人々にとって誇りであり、精神的な支えとして重要な意味を持つ。
世界恒久平和の象徴として広島の都市空間を実現するため、創造的な努力が積み重ねられて現在の広島が形づくられてきた。特に前段に記述したヒロシマの軸線は、平和の象徴として気高く市民の心の支えとなり、同時に力強いメッセージを国内外に発信してきた。

更に、これから計画されるであろう博物館・スタジアム・市民センター・庁舎など重要構造物の軸線は、祈りを込めて爆心地・原爆ドームを指すこととしたい。この軸線はいわゆる眺望・景観の軸線ではない。世界中の人々が爆心地と対峙し、歴史に真正面から向き合うための軸線である。この地の悲劇を学び、核兵器のない平和な世界の実現を誓うための軸線である。
世界の「平和の原点」として広島をデザイン出来ないものかと思う。　　（個人の敬称略）

ひろしまのまちづくりの動き

① 新サッカー場建設の動向！

上空写真(中国新聞 1/21)

・現在の状況
民間事業者からの提案を求めるデザインビルド（設計・施工一括発注）方式で 2 月中旬に公募を終え、3 月末にプレゼンテーションを行い、総合評価して優先交渉権者を決める予定。
1 月 25 日に広島市長、県知事、商工会議所会頭のトップ会談が開催されたが、県知事は事業者が決まり計画の概要が分かるまでは予算化しないと明言。
事業者から県全体の活性化が可能な提案が出てくるか否かに掛かっている。

・公募型プロポーザルによる施設整備要求水準など
「サッカー場機能を核として多目的かつ多機能化した都心交流型スタジアム」を目標に掲げ、県内外から広く集客すること、その効果が県内各地に及ぶことを目指す、とある。
市が求めている多岐にわたる施設整備の要求水準の中で注目すべきは、東側広場から西側の基町環境護岸まで往来できる回遊性のある動線計画である。その他に幅広い世代の県民・市民等が日常的に集い、にぎわいや交流の拠点としてどんな機能を導入するか？施設利用者及び公園利用者とサービスの動線と人・車分離をどう処理するか？
周辺に迷惑をかけることなく、狭い敷地に 3 万人収容できるスタジアムを建設することは容易ではない。

・今後のスケジュールなど
優先交渉権者と 6 月に契約し、実施設計を進め、概ね 2022 年度以降に着工して 2024 年に開業予定。総事業費は約 271 億円。国の補助金約 80 億円、市と県の負担額約 100 億円、企業や個人の寄付 63 億円他で賄う予定だが、国・県・市とも財政事情の厳しい中ハードルは高い。

② 紙屋町・八丁堀地区（通称「カミハチ」）のまちづくり！

昨年 3 月に東急ハンズ前で行った公共的空間活用社会実験「＃カミハチキテル － Urban Transit bay －」の第 2 弾として、1 月末から 3 月 28 日まで基町クレドふれあい広場で人が集う場づくりに取り組んでいる。
緑鮮やかな円形の人工芝を点在させ、テーブルとベンチを置いて市民や買い物客が憩える空間づくり。市中心部の商店街や県・市など 23 者が参加する団体「カミハチキテル」が企画。
大型ビジョンを使って興味深い映像を流したり、ステージを作ってショーを見せる等のイベントがなければ、殺風景な吹きさらしの空間では人が集わないのではないか。
一方、昨年オープンしたアンデルセン新館の南側に作られたオープンスペースは適度に植栽を配置した中にベンチなどが置かれ、買い物客だけでなく通りすがりの人もちょっと一息つけるポケットパークとなっている。
都心の中に新たな憩いの場が誕生するのは望ましいことだ。

基町クレドふれあい広場

アンデルセン南側広場

○ 広島の復興の軌跡・人物編（第２４回）

～広島復興に対して積極的提案をした公園計画コンサルタントである米国人タム・デーリング氏～

はじめに

前回は田原総一朗氏という直接的な復興関係者でなく、後の時代からの言及者・評論家によって復興の意味を検討しようとした。そのことに違和感を覚えた方もおられたかもしれないが、直接現実の計画や事業に関わらなくとも復興の軌跡をたどる上で欠かせないとして、今回も直接的な関係者というわけではないが、広島の復興計画思想構築の過程に関与した思われる外国人を取り上げる。その人は米国人のタム・デーリング氏という公園計画・都市計画分野の人である。このような専門家といえる計画者からの当時の広島への直接的な提案、驚くべきことではないか、ここではその提案内容を解明したい。（以下敬称略）

１．タム・デーリングの関わりと基本的姿勢

タム・デーリングは 1947 年 6 月報告によれば、日本当局の要請により連合軍最高司令官が広島へ派遣したとされ、同地においてデーリングは５日間、市の復興プランを研究し県市当局並びに市民代表者と懇談を重ねたと報告されている。すなわち、広島訪問は広島市・県によるのでなくＧＨＱからの要請ということであり、また自主的に提案に関わったのではなく、ＧＨＱ側の計画者として特別の役割を持った計画者ということになるであろう。とすれば、デーリングの提案がその後どのようにフォローされたのか、あるいはＧＨＱとしての姿勢も問われるところである。

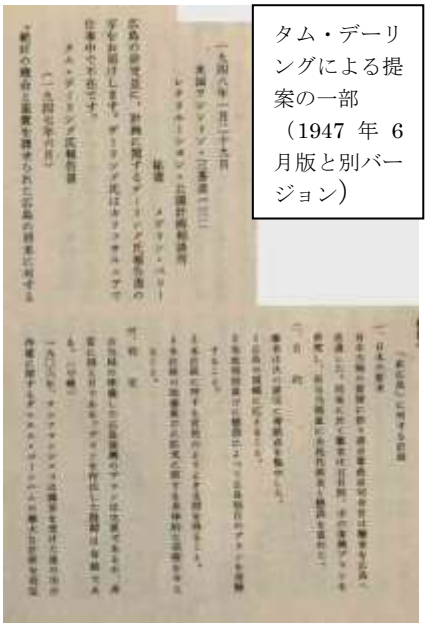
デーリングの提案は、1948 年 1 月 29 日付報告書として「『新広島』に対する計画」の題名で発表されたとされるが、それは実は既に 1947 年 6 月に「新広島に対する計画案―絶好の機会と重い責任を課せられた広島の将来に対する期待」において発表されていた内容とほぼ同じであった。この提案自身は「広島市新史復興資料編」に報告されていたので、主たる内容は把握していたのであるが、筆者の怠慢ともいえるが広島県土木都市計画課編「平和記念都市調査資料―外国人より広島によせることば」（1951 年 3 月発行）という冊子で 1947 年提案であることが記されていてそのことを見逃してきたことが悔やまれる。広島県がまとめていた「平和記念都市調査資料」は多くの外国人からの提案をまとめていて、別途その提案の扱い、実現非実現といった去就などをまとめてみるべきであろう。

都市計画街路や都市計画公園緑地の計画決定はすでに 1946 年 10 月、11 月段階で終了していたのであり、デーリングの関与する段階では広島という都市の性格とか、その枠組みの中での区画整理による細街路や換地設計、土地利用を決めていく過程にあった。

この時デーリングは、恐らく市・県の計画関係者から説明を受けた後、既定の計画に対して感想を述べ、「市当局の準備した広島復興のプランは立派であるが非常に控えめで消極的である。プランを作製した技師は有能であり県市当局者は進取且協力的である。そして公共精神に燃える熱心な多数の市民がある。」と計画の消極性という問題と日本における計画態勢の評価とを併記している。この段階では広島の復興計画を否定的評価するのでなく、むしろ「全世界に対し一つの模範」になるよう励まし支援していることがわかる。

２．デーリングの提案内容

デーリングによる具体的な提案は多岐にわたり、引用しきれないが、Ａグループとして既に広島で基本的に決定していた項目、Ｂグループとしては広島側である程度必要性に気づいていたがまだ決定に至っていなかった項目、Ｃグループとして広島側、日本側で気づいていない項目、あるいはまったく異なる価値観の項目、Ｄその他に分類して、主要なものだけについて取り上げることとする。価値観が違えば他の項目も浮上するので興味のある方は原本を参照されたい。



タム・デーリングによる提案の一部（1947 年 6 月版と別バージョン）

Ａとして、①百米道路、②河岸に二百エーカーの公園を設ける（面積は別として）、③旧厚生・公園地区の復旧に加えて必要に応じ、３２の近隣運動場及び体育館を新設すること。

Ｂとして、①原爆中心地に近く平和記念碑、②河川による防火地帯、両岸には帯状の公園を作り、要点に百メートルの道路を設ける、③原子時代記念館及び平和記念碑、④臨水厚生及び公園地区内は市内のあらゆる海岸及び河岸を包含すべきである。

Ｃとして、①現在の２水路に代わるべき新放水路、②空港、③空地の設置（復興計画区域の１２％を保持する）、④原子時代博物館、⑥広島大学は原子時代誕生地を来訪する世界からの訪問者や、東洋の言語、美術、劇、支那及び日本の庭園、美術、建築、養蚕等の勉学に滞在す

る訪問者に対し、夏季講座を設けて充分役立ち得る可能性がある、⑦臨海公園には京橋川にある宇品島を充てる。

Dとして①旧軍用地、その他国有化した財産は、進駐軍に不要となり次第、家庭菜園、厚生、風致地区の為の空地として利用せらるべきである、②広島を囲む､海からへの森に覆われた山々は、次の目的の為に国有とすべきである。(略)

等々である。このように多岐にわたり、極めて先見の明があるが、ただし問題点としては原子時代として原子力を肯定的、楽観的に捉えていることであろうが、時代の制約として捉えておきたい。

3．まとめとして

個々において参考になる提案も多いが、なによりも全体として、広島に対して温かく励ますような態度が見え、このような米国人がいたのかということでは今更ながら大きな驚きを感じる。上から目線を感じるとか、原爆投下の責任はどうなのかという問い詰めもあるかもしれないが、計画に関わる者として通じる言葉のあることを実感するのである。「広島は日本だけでなく、全世界に対して一つの模範を示すかもしれない」「広島は、全世界の注目を惹いたという事実を認識せよ。即ち、広島は建設的にせよ、破壊的にせよ、新『原子時代』の到来を世界に最初に世界に告げた地として永久に訪問者の興味を惹くであろう。」なのであろう。

［タム・デーリングの略歴］詳細は不明である。肩書としては「レクレーション公園計画相談所」あるいは「ワシントン市居住レクレーション及び公園に関する顧問計画士（プランニングコンサルタント)」と紹介されている。当時、日本でコンサルタントという組織や職能の人は珍しい。　　（編集委員　石丸紀興）

□ ほっとコーナー

やればできる！菌が美味しい仲間になる！

北広島町地域おこし協力隊　前田奈津枝

私は 2018 年夏、地域おこし協力隊に就任し、広島市内から北広島町に移住しました。

協力隊として、地域のお菓子や料理のレシピをおこしたり、地域の食材を使った手仕事の会の企画や、地域の方と「藍染らんらん」というチームを発足し、藍を種から育て、発酵させ、染めたものの商品販売をしたり、「ヘチ活」と称してヘチマの種を配り、育ててもらってヘチマタワシを作って利用促進をしたりして、地域資源や先人の知恵を生かして、環境に優しく、楽しい時間を共有できる物作りや場作りを行っています。

前職を退職し、北広島町へ移住したきっかけは、妹の産んだ子が育っていくのを見て、子どもたちに残していきたい未来と、私が生きたい時間の使い方について考えたからです。

顔の見える農をしたいと思いたった私は、無肥料無農薬栽培の師匠に出会い、半信半疑で学び、実践してみました。すると、土の菌、植物の菌、虫を仲間に野菜がすくすく成長！種を残し、それが芽を出し繋がっていく。やればできるんだと感動しました。

また、季節毎の調味料（味噌・醤油・酢・麦芽糖など）作りをしながら、目に見えない菌や酵素のパワーに感動しています。地域の方に、手作り味噌や柿酢をいただくことがあるのですが、大豆と米を使った同じ味噌でも味がその人によって全然違います。そして置いておくとまただんだんと味に深みが増していきます。柿酢は年配の方の蔵で作ったものの方が酸っぱくて熟練されたような味がします。菌の違いでしょうか、面白いです。

これからも、菌の作り出す野菜や調味料の美味しさ、自然な色の醸し出す染め物の美しさ、菌の柔らかいあたたかさを多くの人に知っていただきたいです。難しくてできないかもと思っていたことも、やればできちゃいます。
米麹作りからでもぜひチャレンジしてみてください！！

○「Hihukusyo ラジオ（第１３回）2020.12.30（＊リンク参照）」報告

昨年の６月より月２回、１時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「Hihukusyo ラジオ（＊リンク参照）」がインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人たちが登場している。今号は第 13 回目の四國光氏の発言の要点を紹介する。

ナビゲーター：土屋時子（広島文学資料保存の会代表）
ゲスト：四國　光（反戦画家・四國五郎氏の長男）
インタビュアー：瀬戸麻由（シンガーソングライター）

展覧会場での四國光氏

―父、四國五郎について―

平和の闘志のように思われている方が多いが、家では優しく物静かな人だった。いつも息をするように絵を描いており、自分が子供のころ、父親はどこの家でも絵を描いているものと思っていた。

ただ人生の価値観を伝えようとして、小学生のころ「つまらんことで怒るな。世の中には戦争を起こす人間がいる。そういう本当に悪い人には本気で怒れ。」とよく言っていた。

―被服支廠と父―

父は家が貧しかったこともあり 14 歳から出兵する 20 歳まで被服支廠で働く。軍靴の生産ラインに所属したが、騒然とした中での仕事が嫌だった。絵を描くことが好きだった父は、工場内に貼ってあった「事故注意」や「安全第一」などのポスターが下手だったので、申し出てすべてを描き直したという。17 歳に事務職に転じ、被服廠の広報誌「まこと」の表紙や挿絵など専属の絵画担当も務めていた。

多感な思春期を過ごした被服支廠は父にとって非常に思い出深い場所だったと思う。

―父の戦争体験・被爆体験とその後の生きざま―

敗戦後シベリア抑留を経て 1948 年に帰国し、被爆後の広島の地を踏む。大の仲良しだった弟が原爆で 1945 年 8 月下旬に死んだことを知る。戦争に行った自分が生き残り、広島に残った弟が死んだことに衝撃を受ける。

出兵するまでは、絵を学び東京で絵描きになることを心に決めていたが、戦争体験を経て自分の得意な絵や詩によって戦争の記憶を後世に伝えていくことを決意する。父の残した言葉に「テーマではなく生き方である」がある。父は画家として単に平和をテーマに描くのではなく、戦争の記憶を継承するために平和を描く人生を選択し、その目的は二度と戦争の道を歩ませないように訴えていく、この一点に尽きる。

父は絵を手放すと訴える手段が無くなるので、自分が描いた絵を決して売らなかった。最初から絵を売って生計を立てる画家の道を断っていた。結果、手元に子供の頃から描いた膨大な作品が残っている。

―広島の二つの顔―

広島は被爆による国際平和都市と戦争に積極的に関わった軍都の顔を持つ。戦前の四國家は母親も兵器支廠に勤め、弟も兵器を作る日本製鋼に勤め、家族そろって加害の側にいた。広島は大本営が置かれた日清戦争以来 50 年間侵略戦争に協力し続け、経済的にも軍需で栄え、その代わり陸軍に乗っ取られたような街だった。

戦前の日本が歩んだ道を信じて疑わなかった自分を悔やんだことも平和運動の動機となる。

―父の死後と自分の関わり―

父が亡くなった 2014 年を契機に一気に社会からの再評価が始まったようだ。翌年から 5 年間に 23 回もの展覧会が開かれ、NHK では父のドキュメンタリー番組が 3 本も制作され、マスコミなどでも多数取り上げられた。

今の日本のきな臭さや危機感により四國五郎の活動が見直されているのではないか。そうであるならば、父の残した絵画や詩や本などを管理しながら、社会からの要請に応じて上手に活かしていきたい。

―峠三吉たちの「われらの詩の会」の動き―

朝鮮戦争前後の言論統制の厳しい中、1949 年に「われらの詩の会」が結成され、父も参加。詩や絵やアートで声を上げ、父が反戦・反核のポスター（辻詩）を描いては会の若者が街中に張り出す行動を起こす。今のバンクシーの活動のようにアート・アクティビズムの走りのようなもの。国民に気づきを与える狙いであり、後に「われらの詩の会」の活動は演劇「河」（作土屋清）として上演される。

暗殺されたキング牧師の言葉「沈黙は暴力に隠された同罪者である」の通り、抑圧に対して沈黙はイエスを意味する。おかしいと思ったときは反対の声を上げなければいけない。

―被服支廠 1 棟保存 2 棟解体のニュースを聞いた時―

被服支廠は市民からも忘れ去られた存在であったが、被爆の遺構と同時に加害の遺構でもあり、さらに世界的にも稀有な巨大建物である。人類の未来のために残すべき財産として世界遺産に匹敵する建物であり、壊す選択肢は考えられない。

被服支廠も保存のための費用が当面の課題になっているが、行政だけでなく海外からの募金など幅広い資金調達を考えればなんとかなるのではないか。

今でこそ世界にメッセージを発信している原爆ドームも 1960 年代前半は取り壊す動きがあったが、市民の保存運動により 1966 年に市議会で保存が決定。当時、世界遺産になるとは誰も想像していなかったのではないか。

被服支廠もこれからいろいろな人の思いや活動により多くの記憶が重なり合い、価値がどれだけ深まるのか今の段階では予想できない。遺構はよりよく生きるために、未来の人のために残すべきものであり、軽々に今の時間軸だけで判断すべきではない。。

―ピース・アート・ミュージアム構想―

被服支廠は世界に残すべき戦争の遺構だから戦争の記憶を継承し、学ぶための施設として活用するのが一番真っ当と思う。

そのアイデアとしてピース・アート・ミュージアム構想を描く。反戦・反核など平和を願って作られた表現物（絵画や文学や映像などのアート全般）を一堂に集めたミュージアム。

その理由は、近いうちに必ず戦争や被爆の体験者がゼロになる。生きた証言者がいなくなった時、残された表現物が次世代に継承できる最後の砦となる。

記録は物事を正しく後世に残すものとして大事である。一方、表現物は作者がこれだけはどうしても伝えたいものを、自分の表現する技術を駆使して表現したものである。表現物に触れて感動した人は作者の伝えたいものが継承された、ということ。感動すれば、行動が変わり、行動する人が増えれば、結果として社会が変わる。表現物には人を変える力がある。

軍備を増強することが抑止力ではなく、新たな行動を起こして社会を変える「記憶」の力の蓄積こそが本当の意味での抑止力になる。

実はこの構想の基は、父が 1999 年に残した最後の画集タイトル「平和美術館」にある。

―広島には展示すべきものが山ほどある―

行政が箱モノを作っても中に展示するものがないところが多いが、広島は逆で展示したいものが山ほどあるのに展示スペースが足りない。

平和記念資料館でも展示されているのは一部で残りは収蔵庫に保管されている。「市民が描いた原爆の絵」も 5000 点以上あるが、展示は一部のみ。基町高校の美術部生徒が被爆者から話を聞いて描いた思いの篭った絵もある。残念ながら丸木夫妻の「原爆の図」は広島にない。

広島には原爆・平和に関わる絵画や詩や小説や映画や漫画やアニメや演劇や音楽などの表現物が多数残されている。特に原爆詩人の峠三吉を筆頭に原民喜、栗原貞子、大田洋子などが原爆を書き残した文学資料はいずれ世界記憶遺産になるのではないか。

―被服支廠にピース・アート・ミュージアムを―

ピース・アートを被服支廠の建物にまとめて保存展示すれば、未来永劫に戦争の記憶を継承し、学ぶことができる唯一無二の情報発信センターになり、アートによる第 2 の平和記念資料館になると思う。素晴らしい役割を未来に向けて果たしてくれるはずだ。

日本は過去に 50 年間戦争し続けた国であり、今後同じ過ちを歩まぬために、戦争の記憶を継承する装置としてピース・アート・ミュージアムを作るべきと思う。作るとしたら広島が作るべきであり、戦争遺構でかつ巨大なスペースを持つ被服支廠が最適ではないか。

広島のまちは海外からも多くの観光客が訪れるが、現在は原爆ドームと宮島を見て帰る人が多い。ピース・アート・ミュージアムができれば第 3 の観光拠点となり回遊性が生まれ、街の活性化にも寄与できる。何よりアートには国境がないから、だれにでも鑑賞できる。

＊コメント＊

父親のことをこれほどまでに理解して話ができることにまず感心した。ピース・アート・ミュージアム構想も説得力があり、県や市のトップも納得するであろう。一人でも多くの人にこのラジオを聞いてほしい。　（編集委員　瀧口信二）

○「被服支廠キャンペーン（＊リンク参照）」より

この１年を振り返る

被服支廠キャンペーンメンバー　瀬戸麻由

広島県が旧広島被服支廠倉庫（以下、被服支廠）の一部解体を発表した2019年の12月、その方針発表1週間後に「現存する最大級の被爆建物・旧広島陸軍被服支廠倉庫を全棟保存してほしい」とWEB署名のサイトをオープンし、同世代の友人5人が声を掛け合って「被服支廠キャンペーン」はスタートしました。WEB署名は開始５日間で1万2000筆以上集まり、想像以上の反響に私たち自身も驚きました。年度末までは署名のほかに、さまざまな視点で被服支廠についてのオピニオンをSNSに掲載したり、建物の見学企画を開催したり、パブリックコメントの提出を呼びかける企画を開催したりと手探りで活動を続けました。様々な団体の尽力や市民の声の甲斐あってか、昨年2月、被服支廠の解体議論は1年間先送りされることになりました。

2020年度に入ってからは、一人でも多くの人がこの建物に関心を持って議論に参加できるようにとオンラインでの企画などを続けています。昨年12月で「被服支廠キャンペーン」の立ち上げから1年が経ったので、これまで自分たちがやってきたことを整理し、数字で振り返ってみました。

・WEB署名：45,553筆（1/13時点）

昨年夏は「75年目の夏」ということもあり報道で被服支廠が取り上げられることも増え、署名もぐんと増えました。広島県外からはもちろん、海外からも署名が集まっています。今後また議論が動くタイミングを見て県知事に提出する予定です。

・メディア掲載：30回以上

WEB署名立ち上げからすぐに取材が入るようになり、特にBBCやAFP通信などの海外メディアから反響があったことが印象的でした。メディア掲載をきっかけに現地を案内することや、講演などに呼んでいただく機会もあり、建物のことや私たちの活動を知ってもらうきっかけになったと感じています。

・オンライン企画：5回開催、参加者延べ143人

昨年7月に「**＼オンラインで／被服支廠キャンペーナーズと喋ろう！**」と銘打ってzoomを使ったオンライン企画をスタートしました。主にSNSを通じて集客し、5回の開催で参加者は延べ143人、参加者の4分の3は県外在住と広島県外の関心の高さが伺えます。署名を通じて建物を知ったものの詳しくは知らないという方も多く、Google Earthを使ったバーチャルツアーを織り交ぜて、私たちキャンペーンメンバーがどんな想いでこの活動を行っているのかを伝え、参加者も一緒に被服支廠にまつわる意見やアイデアを共有する時間を作りました。実は親戚が被服支廠時代にこの場所で働いていたという方、広島大学の寮がここにあった際に住んでいたという方、近くの高校が母校で毎日通学の際意識せずに眺めていたという方など、参加者の方に思い出をお話しいただく一幕もありました。

また、数字では表せないものの、活動を続けていく中で届くさまざまな声が印象に残っています。「卒論に被服支廠について書きたい」という学生さん、「海外の人に伝える方法を一緒に考えたい」という海外からの声、「平和学習にどうやって取り入れられるか相談したい」という学校の先生、「WEB署名で初めて建物のことを知った」という県外在住の方。建物のことを知るだけでなく、一緒に「伝える側」として被服支廠に関わってくださる人の輪が少しずつ広がっていくことを感じた1年でした。

先送りにされたこの議論ですが、当初１棟あたり 33 億円と試算されていた耐震工事費が再調査により 17 億 7000 万円程度になることが判明するなど、当初解体の根拠となった条件も変化する中、今年度末にどういった方針を県が発表するのかが注目されています。**この建物の解体・保存の議論にとどまらない、広島を「どんな街にしたいのか」が問われる大切な機会を、より多くの人と共有するべく、これからも活動を続けていこうと思います。**

○ 読者からの投稿

映画「ヒロシマへの誓い　サーロー節子とともに」の紹介

フリーパーソナリティ　三浦ひろみ

今年の１月 22 日ついに核兵器禁止条約が発効されました。核兵器の開発、保有、使用を禁じる条約で、ヒバクシャの方々をはじめ、平和を願う全ての人々の悲願でもありました。

その核兵器禁止条約に大きな影響を与えた一人のヒバクシャ、サーロー節子さんと、広島出身で被爆二世である NY 在住の竹内道さんを描いたドキュメンタリー映画「ヒロシマへの誓いーサーロー節子とともにー」。

今作では、サーロー節子さんが歩んだ人生が語られるとともに、広島日赤病院初代院長を祖父に持つ竹内道さんがサーローさんとの出会いを通じて、平和運動に関心を持ち、サーローさんと一緒に活動するようになったかが語られています。

2017 年 12 月、ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)が受賞したノーベル平和賞の授賞式で感動的なスピーチを行ったサーロー節子さん。彼女の人生と、あのエネルギーの源を知ることができる貴重なドキュメンタリーです。

ⓒ2019Not Just a Survivor Film, LLC

広島女学院高等女学校在学中に学徒動員先で被爆。爆心地から 1.8 キロ、倒壊した建物の下敷きになった時、「***あきらめるな、押し続けろ、光の方にはっていくんだ***」暗闇の中から聞こえてきた言葉、差し込んできた光を信じ、這い出し生き延びることができたこと等、節子さん自身の言葉で語られ、様々な活動やスピーチ、人との出会いを知ることができます。そんな中で出会った竹内道さん（プロデューサー）にとっても、被爆二世である自らの真実をみつける旅となっていきます。

監督はエミー賞や全米監督協会賞を受賞しているスーザン・ストリックラー。核兵器廃絶の道を力強く前進し続けるサーロー節子さんの姿にパワーをもらい、自分も出来ることを！との思いを強くする作品です。特に、サーローさんの英語での思いを込めた素晴らしいスピーチ、ぜひご覧下さい！そして、世界で唯一の戦争被爆国である日本が核兵器禁止条約に参加すること切に願います。

□ 編集後記

新しい日常の中のまちづくり

第３波のコロナ感染が落ち着きを見せ、ワクチン接種も始まり、暗闇の先に仄かな光を感じる方も多いと推察します。しかし、地球規模の集団免疫が実現するためには地球人口の７割に接種が必要とされ、その実現には相当の年月が必要となります。

私たちにコロナ以前の日常が取り戻せないという論調が大勢を占めています。さらに地球レベルでの脱炭素化に向かう社会の急激な変化が進み、新しい日常が求められています。

ひろしまもまさにこれらの変化の波を真っ向から受けていきます。現在（いま）からこれからの新しい日常とはどうなっていくのかを考えることにより、平和都市として発信し続けていけるまちの骨格を考えることが急がれるのではないでしょうか、

（編集委員　前岡智之）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表